

異文化適応と文化的アイデンティティ

—内モンゴル人の中国、日本体験の比較—

東京学芸大学大学院 教育研究科 ブリンチムグ

ご 紹 介

内モンゴルの留学生から、少数民族の人々のアイデンティティの確立についての論文投稿がありました。少数民族が、どのように自分たちをとらえているのか、生の声をご紹介します。

<はじめに>

中国の少数民族であるモンゴル族やウイグル族、チベット族などは、外国に行ったときに国籍上「中国」となっているため、外国人は「中国人だ」と考えてしまう。しかし、漢字を一切使用せず、中国語とは全く異なった言語と文字を使っている民族が、中国人といわれることに多くの人々が抵抗感をもっている。本研究の結果で、それは中国人と同一視されることで、自分の民族性、アイデンティティ、文化や言語、習慣、民族への誇りを全く無視され、隠されてしまうからであることがわかった。本研究では、中国の一つの少数民族として、内モンゴル自治区という広い土地と少ない人口を有するモンゴル族の人たちに、面接および質問紙による調査を行った。調査結果を受けて、彼らが日本に渡ってから、自民族、自文化への感情に改めて触れ、複数の異文化体験を経験することにより形成されたアイデンティティについての考察を行った。

<モンゴル国と内モンゴルの区別>

モンゴル国と内モンゴルのモンゴル族は、一つの民族として共通の歴史・アイデンティティ・言語・習慣をもっている。しかし、20世紀初期から中期にわたって、ロシアと中国の両国の争いの中で、モンゴル族は民族独立を実現できず、1924年にはモンゴル共和国が成立し、1947年には内モンゴル自治区が成立して、モンゴルは異なった二つの国になった。

<内モンゴルの現状>

中国でのモンゴル族は中国全体で約581万人おり、内モンゴル、リャオニン（遼寧）、チーリン（吉林）、ハイロンチヤン（黒竜江）、シンチヤン（新疆）、チンハイ（青海）、チベット、ユンナン（雲南）などの自治

区・省に分布し、そのうち内モンゴルには約400万人が集中している。内モンゴルは面積が118.3万km²で、中国の全面積の約8分の1をしめ、人口が約2300万人中モンゴル族の割合は17%にも満たない。ほとんどが漢民族である。

内モンゴルから外国に行くには、ほとんど留学する形でしか実現しない。内モンゴルからの外国留学は、1980年代に日本が10万人の留学生を受け入れるという政策を実施したときから始まったが、その後、次第に多様化し複雑化している。その中の大きな特徴の一つは、留学先がほとんど日本であることである。20世紀末までに、日本におけるモンゴル族留学生は数百人程度だったが、現在は3、4千人いるといわれている。

<問題と目的>

本研究では、モンゴルの文化環境にながらも、中国という漢民族の異文化環境で社会人まで育ったという特別な環境におかれた人たちが、日本というもう一つの異文化環境と接触して、受容されかつ受容する過程の実態を調査した。内モンゴル人という、中国人から見るとモンゴル人、外国人から見ると中国人である人たちは、自分をどのように認識しているのか。また、その文化的アイデンティティはどのように形成されているのか、考察していきたい。

内モンゴル人が漢民族の文化と接触し、異文化体験をしたときから少しずつその文化を受け入れ、適応させていくにつれ、だんだん漢民族文化に同化されてきたのは事実である。しかし、その同化されつつあった彼らが、日本でまた新たな異文化を体験し適応していく過程で、心理的にどのような変化が起きているのか、二つの異文化体験からカルチャーショックを受けたのかどうか、異文化に適應することが同化されることであろうか、ということを経験の実態調査を通して、異文化適応と文化的アイデンティティの形成について検討することを目的としている。

また、日本では帰国子女や異文化体験をした人の心理支援や生活支援についての研究が進んでいるが、そ

れでも不適応で自殺に及ぶことも少なくないと聞く。心理学が先進国ほど進んでいない内モンゴルから来た人が、中国や日本で不適応を起こしたとき、心理支援がほとんど受けられない状況でどう対応したのか、異文化体験での心理支援と自己治癒力、適応能力の個人差と国民性について検討していきたい。

1 方法：

面接項目を作り、それにしたがって面接を行う半構造化面接と、面接以外での質問紙による調査（面接調査の参考として実施し、統計的分析は行わなかった）

2 面接対象者：

- ①日本である程度安定した生活を送っている内モンゴル人6名
- ②日本での留学生活を終え、内モンゴルに帰った40代前後の内モンゴル人2名

3 質問紙調査対象者：

在日内モンゴル人20名

4 40代前後の面接対象者を選んだ理由：

40代前後の内モンゴル人の子ども時代は、モンゴル族と漢民族が頻繁に接触するようになり始めた時代である。そのため中国語の教育は、先生をはじめ教科書まで不足していたので、この時代の人たちにとって、漢民族と中国語はまるで外国人と外国語のようなものであったため。

面接のおもな質問内容

①異文化体験への評価

- ・漢民族と接触したときに感じたストレスとその対処について
- ・日本に渡ったときに感じたストレスや違和感とその対処について
- ・漢民族の文化と日本の文化から受けたカルチャーショックの相違点と受け入れやすさの違い
- ・異文化での子育てについてのストレスや感想、言語学習についての子どもへの期待

②アイデンティティの認識

- ・異文化体験をする前の自分、異文化初体験の自分、異文化二次体験の自分、今の自分、将来の自分について。アイデンティティの確立からの人生観や、物事への考え方、生き方について

<結果>

- 1：中国での漢民族への異文化適応に対して、「不適応」あるいは「表面的な適応」では個人差はみられなかった。漢民族に対して受け入れられない理由は似ている。
- 2：日本での異文化適応に対して、個人差があまりみられなかった。とくに日本に来てから「自分がモンゴル人（族）である」という意識が「強くなった」・「はっきりした」というところは、面接対象者と質問紙調査対象者ほぼ全員が一致している。
- 3：各対象者たちは、モンゴル国ではなく内モンゴルに強い民族感を持っているという特徴から、彼らの中では民族的アイデンティティより文化的なアイデンティティが目立った。

在日内モンゴル人の中国と日本での異文化体験を比較すると、日本の方により適応していることがわかった。

<考察>

個人的無意識というのは、第一に意識内容が強度を失って忘れられたか、あるいは意識がそれを回避（抑圧）した内容、第二に意識に達するほどの強さを持っていないが、何らかの方法で心のうちに残された感覚的な痕跡の内容から成り立っている（河合隼雄1967）。すなわち中国での適応は、ある意味で生き残るために本音でないながらも「自分がモンゴル人（族）や漢民族ということよりは、とりあえず中国人だ」というように、環境への警戒心と自己防衛から生じた「表面的な適応」であり、「自分がとにかくモンゴル人（族）である」という内容を、意識が回避したと考えられる。

日本に来てから、環境の変化や社会の寛容さにしたがって警戒心と自己防衛が弱まり、無意識に抑圧されていた民族的アイデンティティが徐々に意識され、彼らのアイデンティティの再構成と自己実現につながった。

中国は、少数民族に民族と国家の概念を一つにする教育を行い、国としての平和をめざしている。しかし少数民族の人々にとって、それはアイデンティティの混乱と拡散をもたらしていると考えられる。